



東洋天文学史

中村 士 著

丸善出版 1,000円+税 220頁

解説書
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

四大古代文明が約4000~5000年前に起こり、天文学も同じように誕生した。互いに数千キロメートル以上離れた場所でほぼ同じ時期に最初の文明が起こり天文学も誕生したのはなぜかを説明する有力な説の紹介から本書の記述が始まる。

本書のまえがきによると、本書は、アジアの天文学史という文脈の中に日本天文学史を位置づけることを目指したものである。そのために、本書を2部構成にし、第I部では古代オリエントとギリシア・インド・中国・朝鮮および東南アジアの天文学史を概観し、第II部で日本天文学史を詳述している。これは、近世以前の日本の天文学が中国・朝鮮の影響を大きく受けていることから、それらの地域の天文学史が日本の天文学史を理解するうえで役に立つという著者の考えによるものである。例えば、蒙古族が中国を征服して打ち立てた元王朝の時代の1280年頃に中国における最も精密な暦法と言われる授時暦が作られた。日本では17世紀中頃になってからこの授時暦が盛んに研究されるようになり、渋川春海の貞享暦の編纂につながったというのはよく知られているが、韓国では15世紀の李氏朝鮮第4代国王世宗の時代に天文暦学の研究や観測が盛んに行われ、授時暦に基づく韓国独自の暦が計算できるようになっていたという。このような事実を知ることによって、著者は「戦前の国粹主義のような狭い視野で渋川春海の業績を評価することもなくなるでしょう」としているが、それはかなり成功していると言えるだろう。

本書には位置天文学などの面から誤解を与えか

ねない表現があるので、ここで注意しておく。p. 5に「惑星は出が毎日少しずつ遅くなる」とあるが、理科年表などで木星等の出の時刻を調べれば、これが間違いであることはすぐにわかる。p. 16に「『衝』の前後、惑星が天球上を移動する見かけの動きもいちばん速い」とあるが、衝の頃は地球と惑星が同じ向きに動いているのだから「見かけの動きもいちばん速い」は間違いである。p. 195に、1884年の万国子午線会議における本初子午線の議決を経て「日本の経度原点は兵庫県明石に置かれ」としているが、明石は東経135°の日本標準時子午線が通る都市の一つに過ぎず、本初子午線議決に際して明石に何かを設置されたわけではない。p. 209には「太陰太陽暦では、常についたち（1日）は新月、15日は満月になる」とあるが、満月は16日になることが最も多く、14日や17日のこともあることに注意したい。校正の不備もやや目立つ。p. 69にある十干は9個しかないし、p. 134の高度・赤緯・緯度の関係式にも間違いがある。p. 144に「持統天皇時代の862年から宣明暦が施行された」とあるが、なぜここに持統天皇が現れるのか不思議である。同ページの遣唐使廃止の年「896年（寛平6）」は正しくは「894年（寛平6）」であるし、pp. 194~199にある西暦と明治年号の換算にも間違いが目立つ。

とはいえ、本書は、東洋において天文学とその宇宙観がどのように誕生し進歩してきたかを知るための格好の入門書として、多くの読者にぜひ薦めたい良書である。

相馬充（国立天文台）